
こんどういさみ

るうね

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

こんどういさみ

【Nコード】

N5364F

【作者名】

るつね

【あらすじ】

自分が地味だと気にする近藤に、土方は……。

（前書き）

今作は、ある程度、新撰組に詳しくないと面白くないと思います。
また、新撰組のコアなファンは怒るかもしれません。
じゃあ、この小説のターゲットって誰なんでしょうね。

「なあ、歳ー歳ーげふうっ！」

呼びかけてきた近藤に、土方は蹴りを入れました。

「な、なんで蹴るのん？」

「なれなれしく呼ぶなっつってんだろ。土方さま、もしくは歳三さま、と呼べ」

「いや、だって俺、局長……」

「ああ？」

「ひえっ、ごめん。でも『さま』付けはあんまりじゃないかな。せめて副長、で勘弁してよ」

「仕方ねえな。で、なんだよ」

「あ、あのさ」

近藤は手の指をもじもじさせながら、

「俺って、何か地味じゃない？」

「……………」

「歳、じゃなくて副長や総司の方が人気あるしさ。下手すると斉藤や永倉にも負けそうだし」

「そんなことねえよプフー」

「わ、笑ってるじゃん！」

「今のは屁だ」

「にやにやしながら言っても、説得力ないよ！」

近藤は目に涙を浮かべて、うつむきます。

「副長にも総司にもかっこいいエピソードがあるしさ。俺なんかゲソコツが口に入るとか、そんなんばっかだよ」

「そんなことないだろ。ほら、あれがある。銃で撃たれた後、平然と動き回ってた、とか」

「あ、そうか！」

「まあ、あれで鳥羽・伏見には出られなかったんだけどな」

「オチをつけるなよう！」

近藤、ごろんとふて寝です。

「あーあー、いいいいいよ。どうせ俺は日陰者ですよ。てゆうか、副長がやればいいじゃん、局長」

（うるさいなあ）

しばらく近藤はぶつぶつと不平をたれます。

土方は無視して、書き物をしていました。不平を言うのにも飽きたのか、近藤は土方のやっていることに興味を持ったようです。

「なにやってるの？」

「隊士募集の文面を考えてるんだよ」

「へー」

と、近藤は土方の手元をのぞきこみます。

「どれどれ、って時給一〇〇〇両？ 局長の俺より全然もらってんじゃない！」

「今はこれぐらいしないと、人が集まらないんだよ」

「そ、そういうもんなのかな」

「さて、と」

「ん、次はどうするの」

「隊の主だった奴らを紹介するのさ。こういう人がいますよ、って書いておけば、職場のイメージがつかみやすいだろ」

「へー、言われてみるとそうだね」

土方は、さらさらと筆を走らせます。

「あれ？」

「どうした」

「俺の名前がないんだけど」

「よく見ろよ」

「んー」

「ほら、最後のとこ」

「小っさ！ つか曲調近藤勇、って。どんな曲を奏でるつもりなの？」

「その下に、おおまかな特徴が書かれてる」

「足臭い、て書いてあるよ？ おまけに童貞で。俺、奥さんと妾もいるのに！」

「多少の脚色は必要だろ」

「マイナス方向に脚色してどうするの！」

「じゃ、これで」

土方が、また筆を走らせました。

「地味、て！ やっぱりそう思ってたんじゃない！」

「うるさいなあ。大体だな、そんなに地味なのが嫌なら努力して派手なことをやればいいだろ。芹沢みたいに、町中ででっかい焚き火をするとかさあ」

「えー、だってそんなことしたら、町の人に迷惑だし……」

「あー、もう。煮えきらん奴だな。分かった、俺がプロデュースしてやる」

「え、まじ？ 副長やさしー」

土方は腕を組み、

「まずは名前を変えよう。いさみ、ってなんだか女みたいだしな。そうだな……大久保大和なんてどうだ」

「わー、男らしー。副長、ありがとー」

「あとは、誰も考えないようなことをして、世間をアツと言わせるんだ」

「誰も考えないようなことかー、うーん……」

「官軍に出頭とか」

「そりゃ、たしかに誰も考えないけどさあ！」

「まあまあ、落ち着け」

土方は近藤をなだめ、

「偽名を使うんだから、ばれるわけないだろ」

「あ、そっかー」

「内部に潜り込んだら、そこでひと暴れして逃げてこい」

「うーん、でもやっぱり一人じゃ心細いな……」

「じゃあ、合言葉を決めておこう。ヤバくなったら『楽しかったな』って言え。助けに行ってやるから」

「ほんと？　じゃあ、行ってみる！」

「気をつけてな」

「あ、この人、近藤勇です」

「なんだと！」

「あ、あれ？」

「近藤勇を捕らえました」

「よし、斬首だ」

「楽しかったなあ！　楽しかったなあ！！」

ざしゅ

土方は空に向けてつぶやきます。

「良かったなあ、これで一つエピソードが増えたじゃないか」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5364f/>

こんどういさみ

2010年10月21日23時10分発行